



# しろね図書館だより

No. 85

発行 新潟市立白根図書館  
平成19年6月1日

## 6月の展示架テーマ 「どうぶつ」

5月の

来館者	14,786人
貸出冊数	15,299冊
予約件数	248件
ブックバス利用者	864人
ブックバス貸出冊数	1,861冊

リクエスト情報 (しばらくお待ち下さい)

1位	鈍感力 (8名)
2位	陰日向に咲く (6名)
3位	風が強く吹いている (3名)
4位	ハイドラ (1名)
	夜は短し歩けよ乙女
	他

第80回読書会 「<sup>おに</sup> <sup>ほし</sup> 鬼の橋」 伊藤 遼 作 太田大八 画 (福音館書店)

6月17日(日) 午後2:00~3:30 <白根学習館ルーム2>

この世の中にまだ鬼や物の怪が存在し、人間と同じように暮らしていた時代の物語。主人公は平安時代に実在した小野篁。荒れ果てた寺の井戸、そこは異界へとつづく道だった。

◆物語を読んだ人なら誰でも参加できます。いろいろな人の感想を聞いて、一緒に物語の世界を楽しみましょう。 しろね図書館友の会、しろね図書館 共催

開館七周年！  
しろね図書館

平成18年度 新潟市立白根図書館利用状況報告

月	来館者(人)	貸出冊数(冊)	予約件数(件)	BM利用者(人)	BM貸出冊数(冊)
4	13,789	14,588	197	323	689
5	14,749	15,092	245	826	1,784
6	14,459	15,850	247	1,001	2,325
7	20,191	17,125	225	633	1,621
8	27,543	15,316	211	5	11
9	18,349	14,725	216	635	1,336
10	15,958	14,376	242	527	1,199
11	16,143	14,665	243	383	1,017
12	13,824	14,226	159	78	200
1	16,300	12,678	195	—	—
2	8,176	10,594	112	—	—
3	16,476	15,771	280	224	522
合計	195,957	175,006	2,572	4,635	10,704

★ブックバス(BM)は夏休み期間、降雪期(12、1、2月)は運休  
★2月14日~28日は蔵書点検のため休館

子どもたちといっしょに 「おおきくなるの」 ほりうちせいいち さくといえ (福音館書店)

3歳の女の子が思うことをそのまま絵本にしたような本です。ほんのちょっと大人びて、いろんなことを知りたくて、だけども赤ちゃんのように甘やかされたくなくて、そんなおしゃまな女の子。

3歳くらいになるとおおきくなったら「なにになろうかな」と考えはじめると思います。また、お父さんやお母さんも「何になるの?」と問いかけると聞きます。小さな子どもにとって、世界はまだまだ知らないことばかりで、これから進む道は無限に広がっています。絵本はその知らない世界を少しだけ教えてくれるものの一つです。毎日一冊でいいので読んであげてください。子どもと一緒に読んでください。

この絵本の絵は色がみを切ってはりつけたようにほっきりとしていて、文章も単純でとてもわかりやすいです。一言で言うならかわいい絵本です。ぜひ、いっしょに読んでください。

6月の行事 ブックバス

1(金)	白根小 10:10~10:40 白井中 12:55~13:35	16(土)	おはなし会 3:00~
2(土)	おはなし会 3:00~	17(日)	第80回読書会 2:00~
5(火)	月潟中 13:00~13:50	19(火)	月潟中 13:00~13:50
6(水)	絵本のじかん 3:00~ 大鷲小* 14:30~15:45	20(水)	絵本のじかん 3:00~ 味方小 13:10~13:50 大鷲小* 14:30~15:45
7(木)	新飯田小 12:35~13:20 茨曾根小 13:35~14:35	21(木)	新飯田小 12:35~13:20 茨曾根小 13:35~14:35
8(金)	小林小* 10:10~10:40 白井小 12:55~13:35	22(金)	小林小* 10:10~10:40 白井小 12:55~13:35
9(土)	おはなしがげ会10:00~ おはなし会 3:00~	23(土)	おはなしがげ会10:00~ おはなし会 3:00~
12(火)	根岸小* 12:45~13:40	26(火)	雑誌・リサイクル 根岸小* 12:45~13:40
13(水)	第80回あかちゃんのはじめてのおうほん 白根北中 13:10~13:50 絵本のじかん 3:00~ 大通小 14:00~15:30	27(水)	絵本のじかん 3:00~ 白根北中 13:10~13:50 大通小 14:00~15:30
14(木)	白根中 12:55~13:35 左瀬地C 14:00~14:40 左瀬小 15:00~15:45	28(木)	白根中 12:55~13:35 左瀬地C 14:00~14:40 左瀬小 15:00~15:45
15(金)	白根小 10:10~10:40 白井中 12:55~13:35	29(金)	白根小 10:10~10:40 白井中 12:55~13:35

◆\*印の場所は児童のみの貸し出しとなります。  
◆大鷲・小林・根岸小学校は児童の安全を考慮し、一般の方への貸し出しは行っておりません。ご了承ください。大通小学校については、今まで一般の方への貸し出しは行っておりませんでした。構内入車の乗り入れをしなければ貸し出しができるようになりましたのでどうぞご利用ください。

# 「おとぎ話の生物学」

森のキノコはなぜ水玉模様なのか？

蓮見香佑（PHP研究所）

一般 909.3ハ

ちょっと変わった題名の本が目にとまったので、さっそく手にとって読んでみると、これがたまたま面白かったのでチョッピリ紹介します。

皆さんは幼い頃、お父さんやお母さんから、かぐや姫や桃太郎などの昔話を聞いたり、絵本を読んでももらったりしたことがあると思います。

それらの物語の中では、たくさんの動物や植物が登場して人間と自由に会話をしたり、時には変身したりもしています。

幼い頃には楽しく聞いたり、読んでもらったりしていたそれらの物語も、だんだんと大きくなってくると「どうして桃太郎は桃から生まれたのか？ 他の果物ではだめだったのか？」などの疑問をもったことがあると思います。

もちろんこれらの物語は作り話であって、実際にはありえないもの、あるいは誇張しているものですが、この本は森のきのこはなぜ水玉模様なのかをはじめ、かぐや姫がどうして竹から生まれなければならなかったのかなど、代表的な13の昔話の中に登場している動物や植物を生物学の立場から科学的に検証し説明したもので、単なる空想世界の作り話ではありません。

カメが恩返しに浦島太郎を連れて行った竜宮城はどこにあるのだろう。また、浦島太郎が竜宮城で過ごした3年間に地上では300年もの歳月が過ぎてしまった理由など、現代科学で理論的に解明されているものもあります。

さらに、ウサギとカメの話では、どうしてウサギはカメに負けたのかは広く知られていますが、明らかに負けるとわかっている競争になぜカメがわざわざ自分から勝負に挑んだのか、などは現在に生きる私たちにとってもおおいに教訓として考えさせられるものもあります。

誰もが知っているこれらの物語に登場する動物や植物を大胆に科学的に解き明かしている本書を読んで、もう一度おとぎの国の世界に戻ってみたいはいかがでしょうか。

（館長 坂井治一）



## 第79回読書会

平成19年5月20日（日）

午後2時から

課題図書

### 「フエノスアイレス午前零時」

藤沢周著

（河出書房新社）

第119回芥川賞受賞作品。

舞台は、福島県との県境に位置する新潟の温泉旅館。カザマは東京での仕事を辞め故郷新潟へ帰ってきたが、家業の豆腐屋は継がず、「みややホテル」へと就職した。この温泉旅館は年数回ダンスパルクで訪れる人たちの他ほとんど言っていないほど客は訪れない。

ラジオから聞こえるような強盗事件が遠い世界のように感じられる日常で、ある日カザマはダンスパルクで訪れたミツコという老女に出会う。ミツコはすでに痴呆が始まっており、目も見えない。カザマにとってミツコは客、ミツコにとってカザマは従業員それ以上でもそれ以下でもないが、いつしか二人の間には心の交流がうまれていた。

☆☆☆☆☆ 読者感想 ☆☆☆☆☆

◆率直な感想。読んでいていまい面白みが伝わってこなかった。延々と雪が降りしきり、場面といえば、ほとんど温泉旅館の中という閉鎖的な空間で登場人物も年寄りばかり。芥川賞をとっているが、選考の基準というかこの作品の評を見てみたい。いったいどんなところが選ばれた要因なのだろうか。

◆雪が降る山奥の温泉宿、いくら読んでいってもな

ぜか、この物語からでてくる色が感じられなかった。強いて言うならば、白とか灰色の世界が続いていた。

なにしろ、会話が新潟弁になっているのでそこは面白かった。普段しゃべっている言葉を文字にしてあるので、こんな感じじゃべっているのかと思うとなんともいえない可笑しさがある。

◆ダンスには馴染みがないから、より一層この作品に入り込めなかったのかも。終わりが方も「えっこんなところで終わるの!？」と思ったほど思いもしない場面が終わっていた。

◆温泉卵（のにおい）がキーワードなのかと思っただけでいたら、ダンスホールでころころ転がって踏みつけられておしまい。ただ、温泉卵のにおいによってミツコはカザマと認識できるところがあり、そのためにあんなにもちよくちよく温泉卵、温泉卵と言っていたのだろうか。考えれば考えるほどわからなくなる。

◆温泉卵が転がって他のダンサーに踏みつけられたとき、カザマはミツコに「大丈夫ですよ」といっているが、この時からカザマのミツコに対する感情が変わっていったのだろう。ダンスをするシーンで、いくつかの会話のやりとりがあり「そういうこと、なんですか?」「からかっている、ですよ」から以後、恋人ともたれるような感じに変わってくる。ミツコも老婆とは思えないくらい若返っているようにも思えた。この頃にやっとイメージの色が付いてきたように感じた。

◆話の大部分は新潟弁で「モーゾたれ」などの単語は言葉を知らない人が読んでもわからないと思う。

まして方言の注釈とかもないし。また、何をテーマにしている何を言いたいのかわからなかった。

◆カザマはミツコに対してすぐやさしい人であると感じた。が、他の客にたいしては見方がきびしい。もし、自分がこういう風に見られていたらと思うといやになる。

◆最初、この作品を読んで読書会で何を言えはいいのかわからなかった。舞台がどこの温泉旅館かすぐ気になった。「ホテルみやや」と出ていたので一瞬弥彦かと思っただけだったが、「赤湯」「狐の嫁入り」とでていたのでのせ・角神のあたりかな？

◆読むときは自然に音になって頭に入ってくるからわからない言葉があるとストレスになるが、今回は大丈夫だった。どちらかというと、西蒲原に近いような方言だと思っし自分が話している言葉に近いような気がした。

◆ところどころ物語と関係のないような描写がでてきてわからない場面もあった。

その後、話題は新潟県の方言の話へと脱線していき

ました。（小林友治）

\*\*\*\*\*

次回の読書会は6月17日（日）午後2時から

課題図書は

「鬼の橋」伊藤 遊著 大田大八画

（福音館書店）

本は図書館カウンターで用意してあります。物語を

読んで一緒に盛り上がりましょう!!

本を読んだ人なら誰でも参加できます。